

『北海道の産業とともに』



北海道大学工学研究院長・工学院院长・工学部長 馬場 直志（ばば・なおし）

略歴:1950年札幌生まれ。1973年北海道大学工学部卒業、1978年北海道大学大学院工学研究科博士課程修了。千葉大学工学部助手、北海道大学工学部講師、助教授を経て1998年に教授。2008年4月に教育担当の副研究科長となり、2010年4月からは工学研究院長・工学院院长・工学部長。

北海道大学では、教育研究に関わる4つの基本理念として「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」及び「実学の重視」というのを掲げている。北大工学部においても、これら4つの理念を具現化するように教育研究を行っている。

北海道大学の実学重視の理念においては、『北海道の特性を生かした学問の創造を推進するとともに、産学官の連携協働の拡大を通じて、研究成果を北海道、さらに日本、世界に還元する。あわせて大学院における高度な専門家及び職業人の養成並びに社会人教育を充実することを目指す』とされている。

昨年ノーベル化学賞を受賞された北大名誉教授の鈴木章先生は、『工学は実学です。この実学を重んじるという伝統は、クラーク博士以来の北海道大学の特徴の一つで、工学は先ず人の役に立つということが第一条件だと思います』と述べられている。実際に、鈴木章先生のノーベル化学賞受賞につながった鈴木－宮浦クロスカップリング反応が、医薬、農薬、液晶、有機 EL など様々なところで役立っている。北大工学部で誕生した鈴木－宮浦クロスカップリング反応が世界中で使われ役に立っているが、北海道の企業においても鈴木－宮浦クロスカップリング反応が更に有効に使われることを望みたい。北海道大学における研究の中には、北海道の産業とともに発展したものが少なくないという状況を継続させたい。

北海道の自立を考えるには、世界的観点から北海道を見据える必要がある。近年、益々グローバル化が進んでいるが、工学教育においても国際化は必須となっている。昨年度から始まった6年間に亘る北大の第二期中期目標の一つには「教育の国際的通用性を向上させ、学生の国際的流動性を高める」が掲げられている。このために国際的に通用する単位互換制度を構築する必要がある。北大工学系では、ダブルディグリー・プログラムを積極的に進めようとしている。ダブルディグリー・プログラムとは、北大と外国の協定大学の両方から修士号もしくは博士号の学位を授与されることであり、北大生は外国の大学に1年程度在学し単位修得することになる。

北大には工学系教育研究センター(CEED: Center for Engineering Education Development, <http://www.ceed.eng.hokudai.ac.jp/>)があり、国際性啓発教育プログラムの開発を行うとともに、実践科学技術英語、Brush-Up 英語講座を開講している。また、CEED では国内外のインターンシッププログラムを推進している。最近、海外インターンシッププログラムに参加する学生が増えつつあることは喜ばしい。鈴木章先生は1965年から2年弱、米国パデュー大学で研究されブラウン教授(1979年ノーベル化学賞受賞)の薫陶を受けられた。このような経験からも鈴木先生は若者に海外へ行くことを勧めている。学生に対する国際性の涵養により、実学としての工学を北海道の産業に活かせる人材が多く出てくることを期待したい。

本年9月8～10日に北大工学部で、日本工学教育協会と北海道工学教育協会の主催で“近未来を拓く工学教育”をメインテーマとして「工学教育研究講演会」が開催される。ここは、工学教育に関する全ての内容を網羅する研究発表・事例報告の場となっている。国際セッションも設けられており、今年度は“工学教育における国際連携”をテーマにしている。一般の方も参加できるので、ご興味のある方々はご参加願いたい。